

3. 丹沢山麓におけるアライグマの分布と防除の現状について

長縄今日子¹⁾・中山文²⁾

The Present Habitat and Its Removal of Raccoon, *Procyon lotorn*, in the Foot of the Tanzawa Mountains

Kyouko Naganawa & Aya Nakayama

要約

丹沢山麓におけるアライグマの分布状況を把握するために、市町村への聞き取り、踏査、自動撮影装置による分布調査を行った。調査の結果得られた2004～2006年の情報と2001～2003年に得られた情報とを比較した結果、過去に単発的な情報しか得られなかった地域でも継続的な情報があり、丹沢山麓でも着実に定着地域が広がり、分布が拡大していることが示唆された。また、市町村に寄せられた目撃や有害駆除地点による分布情報と、調査として実施した自動撮影装置や痕跡確認地点による分布を比較したところ、市町村に寄せられた情報より大幅に生息地が広がっていることがわかった。今後、アライグマの根絶を目指すためには、生息情報の収集と捕獲のための体制作りが急務と考えられる。

(1) はじめに

アライグマは、昭和52年に放映されたテレビアニメ「アライグマラスカル」で人気を博し、原産地の北米や中南米から幼獣がペットとして輸入され、飼育する人が急増した(常田, 2001)。しかし、気性が荒く、飼育が困難なために遺棄する事例が増加し、その後遺棄された個体が野生化して各地で分布を広げている(池田 2002)。

北海道では、1990年代からメロン、スイートコーンなどの農作物被害が増大したほか、ニホンザリガニやエゾサンショウウオの捕食、アオサギの集団営巣放棄などが報告され、在来種への悪影響が懸念されている(池田, 1999)。

神奈川県でアライグマが問題になり始めたのは1997年頃である。県自然保護センター(現自然環境保全センター)に鎌倉市や横須賀市、相模原市などから、家屋侵入などの被害について相談が寄せられるようになり(自然保護センター帰化動物の相談メモ)、その後1997～2000年、自然保護センターでは、捕獲体制が整うまでという条件で市町村で捕獲された個体の最終処分を行っていた(牧野, 2002)。それによると、1997年1市1地域3頭だった搬入実績が、2000年には鎌倉市、藤沢市、相模原市など8市42地域198頭にまで拡大したという(牧野, 2002)。金田(1999)、岸(2003)などの報告からも、藤沢市、茅ヶ崎市、横須賀三浦地域などを中心に分布を広げていったと考えられている。

2001年度には、捕獲許可権限が市町村に委譲(横浜市と三浦市をのぞく)され、本格的に各市町村で有害駆除が開始された。

その後、2005年に施行された「特定外来生物による生態系等に係わる被害の防止に関する法律」を受け、2006年4月に「神奈川県アライグマ防除実施計画」が策定された。

これまで、被害を起こした個体を中心に行われてきた捕獲体制から、生態系被害に考慮し目撃情報などからも積極的に捕獲を実施し、10年後にはアライグマの根絶を目指

す内容となっている。

丹沢山地は、首都圏でも有数の豊かな生物相を有する山塊である。外来種の侵入は、一方的に在来種が犠牲になるような生物間相互作用をもたらしやすいと考えられ(鷲谷, 2002)、アライグマの分布拡大は、山麓部への農作物被害のみならず、丹沢の在来生物への影響、生態系の攪乱が懸念されている。

そこで、今回の調査は、丹沢山麓におけるアライグマの分布を抑えるとともに、周辺市町村での被害対策の現状を整理し、今後の防除対策に生かすことを目的とした。

当初、中小型哺乳類の調査項目に含まれていなかったため、調査費用、期間ともに制約があり、十分な野外調査を実施することはできなかったが、聞き取り調査などで多くの方々にお世話になりまとめることができた。

各地域の市町村担当者の方々には、お忙しい中時間を割いて対応して下さった。また、各地域で野生動物の調査に従事されている方々が、快く調査データを提供して下さった。津久井地域は、町史編纂事業で哺乳類を担当されている岡林良一氏、鳥獣保護員井上克彦氏、厚木市は、東京農業大学野生動物研究室太田真琴氏、同研究室鈴木圭氏、厚木市郷土資料館槐真史氏、秦野市は東海大学藤吉正明氏、NPO法人丹沢ドンの協力をいただいた。また、日本大学野生動物学研究室田畑真悠氏からは、丹沢山麓全域における痕跡情報、野生動物サポートネットワークの葉山久世氏からは、会で実施されたアンケート調査の生データ等をご提供頂いた。この場をお借りして、厚く御礼申し上げる。

(2) 調査方法

調査地は、丹沢山麓に位置する市町村の相模原市津久井自治区、同市相模湖自治区、城山町、愛川町、清川村、厚木市、伊勢原市、秦野市、松田町、山北町とした。

2005年10月～2006年6月にかけて、各市町村担当者への聞き取り調査をおこない、その結果から得られた情報をもとに、地元住民への聞き取り調査と踏査による痕跡の確認、センサーカメラによる自動撮影を行った。

痕跡調査は、捕獲実績のある厚木市、城山町、秦野市、伊勢原市、愛川町の目撃情報が寄せられた地域とその周

1) 県立宮ヶ瀬ビジターセンター 2) 神奈川県立生命の星・地球博物館外来研究員

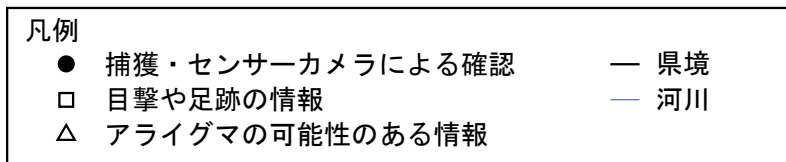
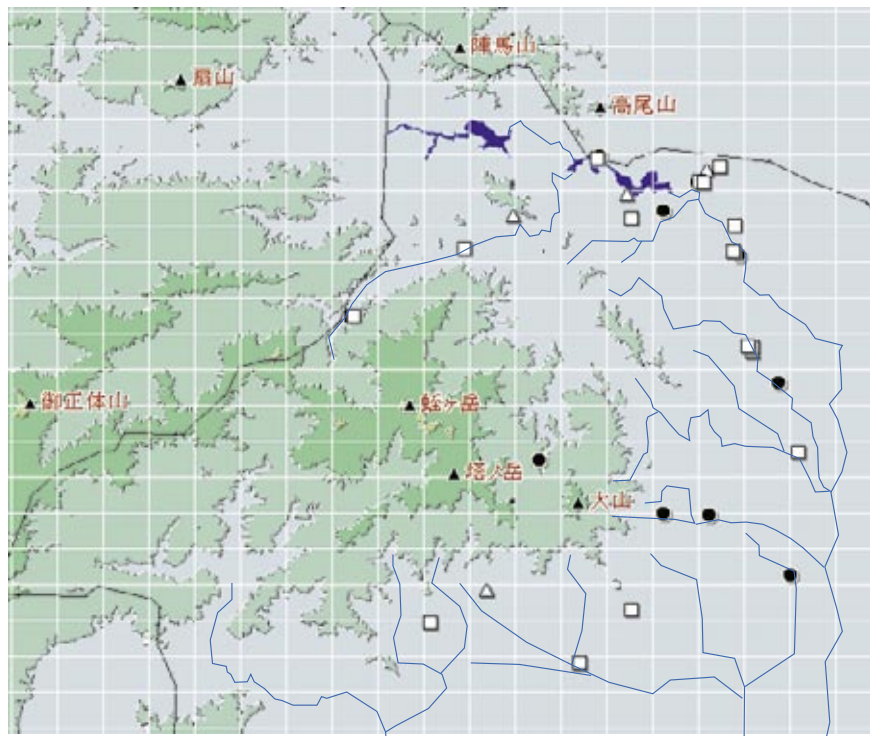


図 1. 2003 年までの情報

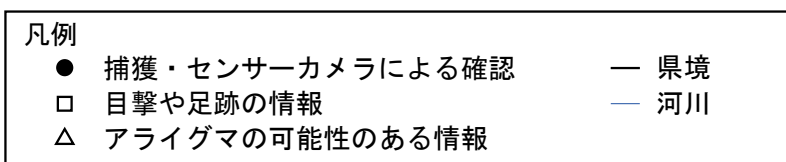
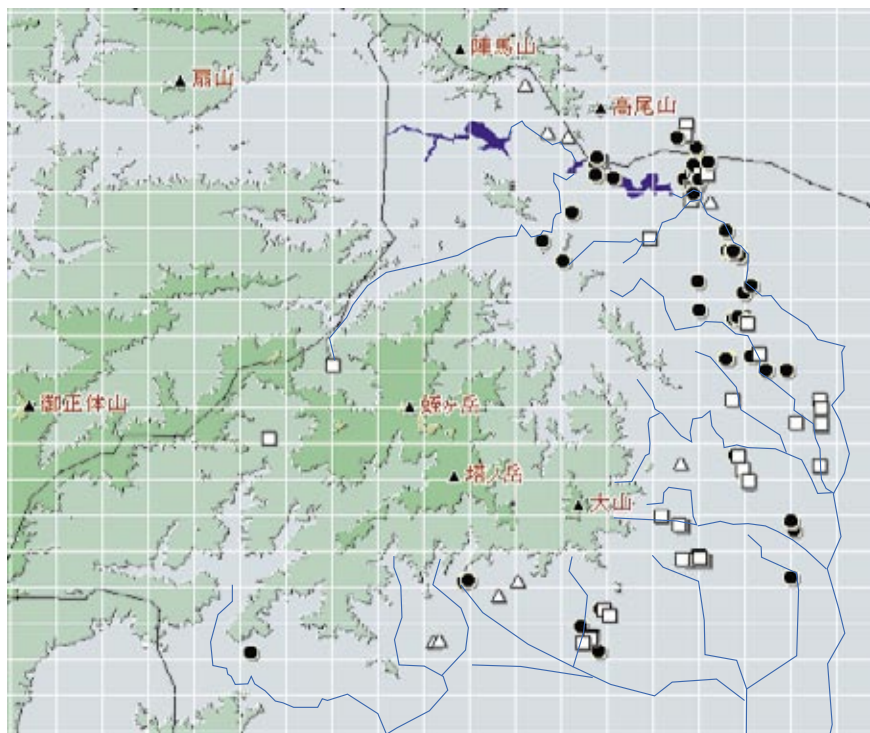


図 2. 2004 年から 2006 年 8 月までに得られた情報

辺の農地や沢筋を中心に行った。センサーカメラによる確認は、3台のカメラを2005年12月～2006年6月までの期間、目撃情報が得られた地域の山側を中心に、計15箇所18回設置した。

とりまとめにあたっては、以上の結果のほかに、調査地域において大学や市民グループが行っている野生動物調査で得られたアライグマの情報も加えた。

(3) 調査結果と考察

A. 丹沢山麓におけるアライグマの分布

図1は、2001～2003年のアライグマに関する情報（かながわ野生動物サポートネットワークアライグマプロジェクトのデータに市町村からの情報を加えたもの）、図2は、2004～2006年6月までに得られた生息情報である。両者を比較すると、過去に単発的な情報のみだった地域でも、継続的に目撃情報や捕獲情報が得られるようになっていくほか、不連続であった分布が、東丹沢の山麓部で連続的になってきていることがわかる。

確実に定着していると考えられる地域は、城山町、厚木市、愛川町、相模原市津久井自治区である。

a. 城山町

城山町は、県のアライグマ防除計画の中で、緊急対応地域に指定されており、2000年から継続して有害駆除や目撃情報がある。2004～2006年8月までの情報件数は、39件。内訳は、23件の捕獲、5件の交通事故死体。ほかには家屋進入、飼育中のメダカ、カモの食害といった生活被害、スイカ、トウモロコシなどの農作物被害であった（図3）。しかし、アライグマは夜行性のため、姿を確認できる機会が少ない。また、農作物や果樹の食害があったとしても、ハクビシンなどとの識別が難しいために町への報告は少ないと思われる。城山町担当者早坂氏は、捕獲をきっかけに、実は我が家も被害があった、と周辺で被害報告が増えるケースもあり、実際の生息状況はさらに多いと考えられると語っていた。

2000年から2004年まで、年間2～3頭程度だった捕獲実績は、2005年度から10頭となり、2006年度は8月まで



図3. アライグマによるスイカ被害（城山町）

で、すでに14頭に達している。その中には母子と思われる成獣と若齢個体が同時に確認されている（図4）ほか、幼獣が保護された事例もある。こうしたことから定着していることは確実と考えられ、密度が着実に高まってきていることが予想される。

b. 厚木市

2004～2006年の確認件数は36件であった。相模川沿いを中心に、目撃情報や家屋侵入などの被害報告があったほか、痕跡調査による足跡の確認が10件（田畑、2006）、センサーカメラによる情報が東京農業大学キャンパスなどで14件あった。聞きとり調査によると、七沢・小野地区では2000年頃から、農作物被害が続いているということであった。中荻野や飯山では、捕獲や足跡が確認されているが、付近にアライグマが生息しているという認識を持っている人は少なかった。相模川沿いの地域では、親子と思われる複数個体が同時に目撃されており、繁殖している可能性が高い。

捕獲実績は2004年度3頭、2005年度は7頭。聞き取りを含めると住民による目撃情報は増加傾向にある。しかし、2006年8月現在、市で把握しているのは4月から寄せられた3件の目撃情報のみであり、その情報も正確に記録されておらず、場所などは不明。捕獲も実施されていない。城山町と同様に緊急対応地域に指定されているため、早急に捕獲体制の整備が必要である。

c. 愛川町

愛川町は、2004～2006年の確認件数は17件であった。交通事故死体が3件、目撃およびセンサーカメラが3件、捕獲が11件である。八菅山付近の中津川沿いで、頻繁にアライグマの目撃がなされており、家屋進入、そして、飼い猫が食害を受けている。アライグマに殺されたネコの死体を埋めたが掘り返され、再度食害を受けたという聞き取り情報もあった。飼い猫の被害は、相模湖町、横須賀市などでも報告されており、横須賀市によると、アライグマに襲われたと思われるネコは、鋭い爪で顔面をそがれ、ほとんど顔の形状をとどめておらず虫の息だったという。屋外に設置しているネコのエサをめぐり、アライグマと争うケースがあると考えられる。

田畑氏の報告（田畑、2006）によると、交通事故死体に胎盤痕と乳首の色素沈着が確認された経産個体があり、愛川町でも定着の可能性が高い。



図4. 城山町で捕獲されたアライグマ

地元住民への聞き取りでは、『わなで捕まえても殺すのは嫌だから、城山町のほうの山へ放しているらしいよ』といった話が聞かれ、飼育個体の遺棄だけでなく、捕獲個体の放野による人為的な分布拡大の可能性が示唆された。こうした現状は町へは報告されていない。

d. 相模原市津久井自治区

2004～2006年の確認件数は、16件であった。内訳は、捕獲3件、目撃3件。センサーカメラによる確認や痕跡情報が10件である。津久井湖周辺から、宮ヶ瀬に近い集落に至るまで広範囲で確認されている。最も集落から離れた場所は、神之川林道での目撃情報である。現時点では分布の連続が確認されていないため、遺棄個体と思われるが、城山町と接する津久井湖付近の山で、2001年頃捕獲した個体を飼育していた家があり、飼育できなくなった後、再び山に放野したという。また、ここ6年間で15頭以上捕獲がある城山町葉山島と尾根を隔てた根小屋地区では、幼獣を処理した動物処理業者の報告写真があり、この付近で繁殖したと思われる。こうしたことから、津久井自治区内での定着もほぼ確実と考えられる。

e. その他

伊勢原市では、痕跡調査による足跡確認が10件（田畑、2006）。捕獲が2003年度1件。これは、サル用のオリに捕獲されたが、当時は目的外の種は放野するようにと県から指示があり、そのまま放野したという。愛川町でも2003年度に同様の報告がある。

また、市へ報告がある目撃情報は2003年度に石田地区で1件。聞き取り調査では、日向地域で2000年頃から農作物被害と農家の生ごみ捨て場でたびたび目撃があるとのことだった。

秦野市の確認件数は16件。客観的な判別材料はない捕獲情報が2005年度に2頭。2006年8月に、ブドウの食害があった農地で1頭捕獲されている。センサーカメラによる確認は5件。位置としては、伊勢原市と接する弘法山の裾、丹沢の登山口に近しい大倉や小養毛などである。このほか足跡も確認している。

相模湖町では、目撃情報とネコの食害被害の報告があった。山北町では県立公園予定地で、生物調査のセンサーカメラに写っている。県で捕獲を試みたが捕獲はできていない。

清川村では、これまでのところ単発的な目撃情報しかないが、隣接する市町村で分布の広がりを見せていることから、今後、周辺市町村と情報交換を行いながら、捕獲体制を整える必要があると思われる。

特に、津久井、相模湖、城山町の北側は、八王子市高尾山に通じており、八王子市では、以前からアライグマの生息が確認されている。八王子市の捕獲実績は、2005年度に3頭、2004年度21頭、2006年は8月までで22頭である。（現在、八王子市内の被害地域は中央高速八王子インター周辺が中心であり、神奈川県県境付近の情報はほとんどない：八王子市役所談）。今後、捕獲体制を整えるためには東京都の周辺市町村との情報交換、協力体制が欠かせないものと考えられる。

B. 丹沢山麓の市町村による防除対策の現状

丹沢山麓の被害状況は、農作物被害として、トウモロコシ、スイカ、落花生、ブドウ。生活被害として、庭のカキ、

キンカン、池のコイやメダカ、屋根裏や床下への侵入、飼い猫の食害などがあつた。防除のためのネット、柵などは被害者が自前で購入し、設置している。愛川町では、田の草取り用に飼育していたアイガモがアライグマに襲われる被害を受けた農家があり（足跡で判別）、後に自衛で電気柵を設置し、防除に成功している。ここ数年、落花生の食害を受けている家では、落花生の周囲をネットで覆うとともに、畑の脇に柵を設置し、毎年のように捕獲に成功している。通常、在来種による農作物被害の場合は、ネットで覆うなど自己防衛を行い、やむを得ない場合に有害駆除捕獲となるが、野生個体の根絶を目指すアライグマの場合は、農作物などに誘引され出沒しているうちに捕獲する方法が、分布拡大を防ぐためには有効といえる。また、家屋侵入被害で出入口となっていた場所をふさいだ後、来なくなった例があるが、防除行為が分布拡大を招くともいえるだろう。アライグマの場合は、農作物の物理的な防除と捕獲をセットで実施することが必須と考えられる。

現在の捕獲状況について、各市町村に聞き取りを行った結果、目撃情報のみで捕獲を実施している自治体はほとんどなく、ハクビシンと思われる農作物被害の現場に柵を設置したところ、捕まったという例が比較的多かった。

捕獲体制としては、市町村保有のオリを貸し出し、農家や地域住民など被害申請者がオリの設置者となっているケースが多かった。設置者が定期的にオリを見回り、捕獲された場合は市町村に連絡。市町村担当者立ち会いの下、その後の処分に移るというものであった。処分方法は、城山町は専門業者に委託。他の市町村は、捕獲実績が少ないこともあり、市町村職員や鳥獣保護員などが二酸化炭素などで安楽死処分させていた。

オリ保有台数は各市町村2～5台であり、同じオリでハクビシンなどにも対応しているため、柵が不足した場合は農協や各地域県政総合センター保有のオリを利用しているとのことだった。また、今後に向け、アライグマ専用のオリの購入を検討している市町村が多かった。ちなみに、県内でもっとも捕獲実績のある横須賀市（2005年度399頭）の柵保有台数は、150台である。

市町村担当者によると、捕獲作業は農家などの協力を得ることができるため、費用、労力もそれほど負担ではないが、捕獲後の個体の処分に苦慮しているとのことだった。殺処分する場合は安楽死が義務づけられており、愛玩動物だったアライグマに対しては愛護団体などから薬殺など痛みを伴わない方法が求められている。しかし、防除計画にのっとり、捕獲目標を達成するためには多くの個体を捕獲しなければならず、薬殺や焼却などの処分費用にかかる負担は大きい。

現在アライグマ防除計画で、重点対応地域に指定され、捕獲実績のある横須賀市によると、2004年度450頭、2005年度には399頭を捕獲している。捕獲作業は専門業者に委託しており、捕獲を中心とした防除対策費用に、年間約1,200～1,300万円を費やしている。捕獲費用の内訳は、オリの設置費用1,000円/台、オリの回収8,000～9,000円/台、薬殺代・獣医への移送費約8,000円/頭、焼却処分費約2,000円/頭、合計1頭あたり約19,000円となっている。

横須賀市に隣接する三浦市もほぼ同様の体制で捕獲を実施している。しかし、三浦市の場合は、2005年度まで

二酸化炭素装置を利用した捕殺を行っていたため、費用負担がいくらか少なかった。2006年度から従事出来る人手が確保出来なくなり、獣医による薬殺に変えたために費用負担が大きくなっているという。

県の試算では、生息数 1,000 頭の場合、年間 560 頭以上捕獲しなければ、アライグマの生息数を減少させることはできないとしている（神奈川県, 2006）。現在、神奈川県内の生息推定頭数が 4,030 頭（神奈川県, 2006）とされていることから考えると、少なくとも年間 2,257 頭の捕獲実績が求められることになる。この捕獲目標達成のためには、先に示したように多額の費用負担が求められ、仮に全捕獲個体を薬殺処理すると、およそ 4,300 万円の費用が必要とされるのである。

この費用を各市町村の財政に頼るのは大変負担が大きく、到底まかなえるものではない。特に、丹沢山麓では、サル、シカ、イノシシなどすでに深刻な野生動物被害の対策に追われている自治体が多く、多くの市町村で、「シカ、サル、イノシシで手一杯で、アライグマまで手が回らない。」といった声が聞かれた。

今後、二酸化炭素による捕殺をまとめて行うなど、費用面、労力面で継続可能な方法の検討が必要であり、各市町村単位ではなく、捕獲体制や費用面で、県、研究機関、農協や市民グループの協力体制が不可欠といえる。

三浦市では、2005 年度の同時期に比べて 2006 年度の捕獲実績が半減し、農作物被害も軽減していた。これはこれまでの捕獲努力により生息数が減少に転じた結果と考えられる。しかし、生息数減少に伴い捕獲が難しくなっているとも考えられる。アライグマは学習能力が高く、捕獲されてもオリのふたを開けるコツを習得する個体や（180 度回転させると檻のフタが開く）、オリの外から餌をとる個体が現れているという話もある。

三浦市では、2006 年度「神奈川県アライグマ防除実施計画」が策定されたことを受け、これまで被害情報を受けてから設置していたオリを、住民からの依頼がなくとも生息している可能性がある神社仏閣周辺などに積極的に設置し、捕獲に努めているとのことであった。このように今後、多くの市町村で捕獲技術を高める努力が求められるであろう。

また、根絶したかの判断も慎重に行うべきである。イギリスのヌートリア根絶事業では、最後の捕獲から 21 ケ月間罠をかけ続け、捕獲されなかったため根絶に成功と判断している事例（小池, 2006）は、参考になるであろう。

また、効率よく捕獲することも重要である。繁殖期までに母親である個体を捕獲することで、幼獣も死亡すると考えられるため、繁殖期までの捕獲圧が高いほど、個体数増加を抑えることができるとされている。

特にアライグマの妊娠率は 87.5%、平均受胎率は 4.79 頭/腹と高い繁殖力を持つ（牧野, 2002）ため、繁殖期を考慮することは重要である。

通常、アライグマの繁殖期は 3 月末～6 月といわれているが、神奈川県では有害駆除個体から、春と秋の 2 回繁殖していることが確認され、妊娠期間が 1 月下旬～8 月下旬。分娩期間は 3 月下旬～10 月下旬までと繁殖可能期間が長期にわたると考えられている（牧野, 2002）。

生息数を減らし、野生個体の根絶を目指すためには、捕獲技術を高めること、捕獲効率のよい繁殖期により強い捕獲圧をかけること、そして、周辺市町村の協力体制が不可

欠といえる。一市町村が努力しても、隣接する市町村で捕獲実績を高めることができなかつた場合、個体の供給が続き、費用と労力負担は延々と継続することになるからである。

C. 各市町村の情報収集体制

図 5 は、相模原市津久井自治区（旧津久井町）、城山町、愛川町に寄せられた住民からの情報（目撃、被害情報）と捕獲位置をしめしたもので、図 6 は、同地域において、津久井町史編纂事業による哺乳類相調査や今回の調査などで得られた情報を示したものである。図 7 は、厚木市、伊勢原市、秦野市の目撃、被害情報と捕獲位置をしめしたもので、図 8 は、同地域におけるセンサーカメラや痕跡調査による野生動物調査の結果を示したものである。いずれの地域も、市町村に寄せられた目撃、被害情報の位置と、哺乳類調査によって得られた確認位置とに違いがあることがわかる（今回の調査では、丹沢山麓の市町村を中心に聞き取りや痕跡調査を行ったため、城山町は重点的に現地調査を行っていない）。2005 年度、2006 年度ともに、地元住民から市町村に寄せられた目撃や被害情報はごくわずかであった。しかし、今回の調査や大学の研究室などによる哺乳類調査の結果、市町村の生息記録よりさらに丹沢山地側で生息確認を得ることができた。

秦野市は確認件数 16 件のうち、野生動物調査による情報は 12 件にも及んでいる。

現在、ほとんどの市町村におけるアライグマ情報の収集手段は、住民から寄せられる目撃情報（交通事故死体含む）と農作物や生活に関する被害情報に限られる。しかし、前述したようにアライグマは夜行性で目につきにくく、たとえ、目撃したとしても、識別ポイントを知る住民は少なく、ハクビシン、タヌキ、アナグマと間違っただけで見間違っている可能性が高い。農作物被害もハクビシンなどとの区別が付きにくい。こうした実状から、地元住民からの情報だけでは、実際の生息状況の把握は困難であると思われる。

こうした実状を考えると、アライグマの生息情報をつかみ、捕獲を行うためにはあらたな情報収集手段の検討が必要であろう。

城山町では、交通事故の確認件数が周辺市町村に比べて多かったが、これは、轢死体の回収業者が写真記録を町に報告する義務があることから明らかになったものである。業者の報告記載はタヌキとなっていたが、町担当職員が写真を確認したところアライグマだった例が 5 件あった。他の市町村では、轢死体の写真記録が残されていることはなく、例え、アライグマがタヌキと記載されていてもその確認手段を持たない。今後、情報収集の一手段として取り入れることができれば、確実な生息情報として有効といえる。

また、農作物被害の加害獣を特定する手段として、比較的足跡が残りやすい農地周辺では、足跡トラップの活用も考えられる。アライグマは、タヌキ、ハクビシンなどと比べ、明らかに長い指と大きな後ろ足を持ち、しっかり足跡を確認することができれば識別は容易である（図 9）。

また、今回、アライグマの生息が認識されていない地域で生息情報を得ることができた手段として、センサーカメラによる自動撮影があげられる。夜行性で痕跡のみでは種の判別が困難な中型哺乳類の確認手段として有効であり、特に夜間獣道などに出没した個体を撮影出来ることから、山中に入り込んだ個体の確認にも有効であると思われる。

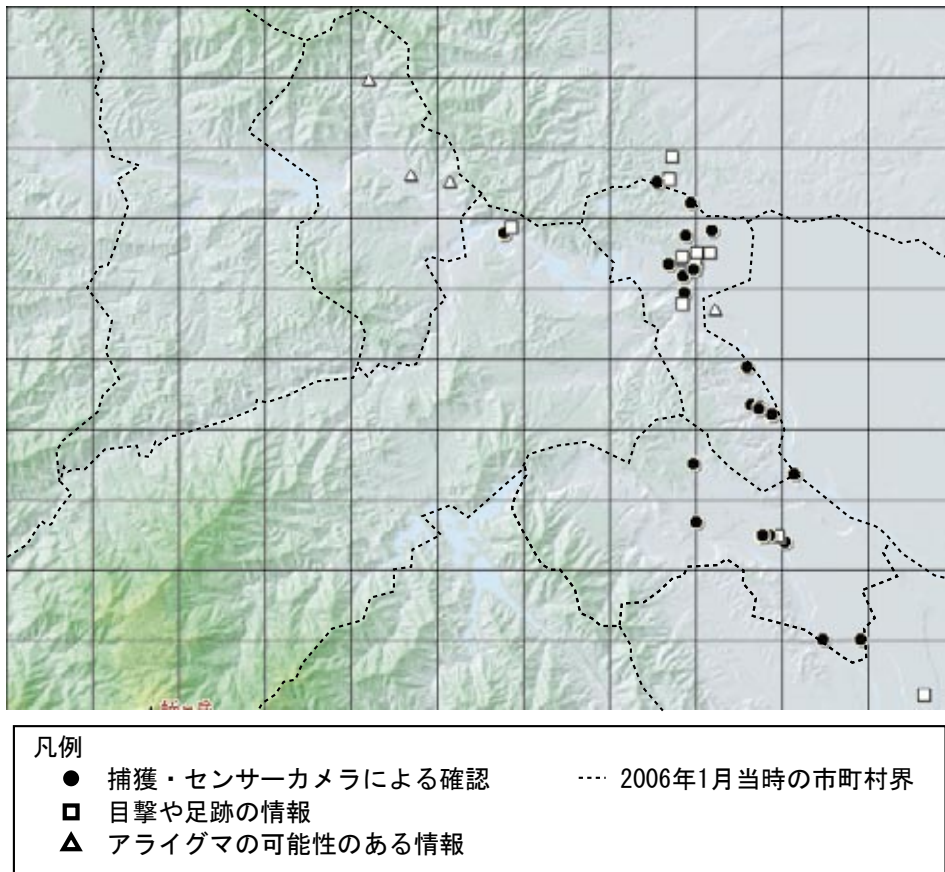


図 5. 市町村に寄せられた情報 (2004 年～ 2006 年 8 月 まで)

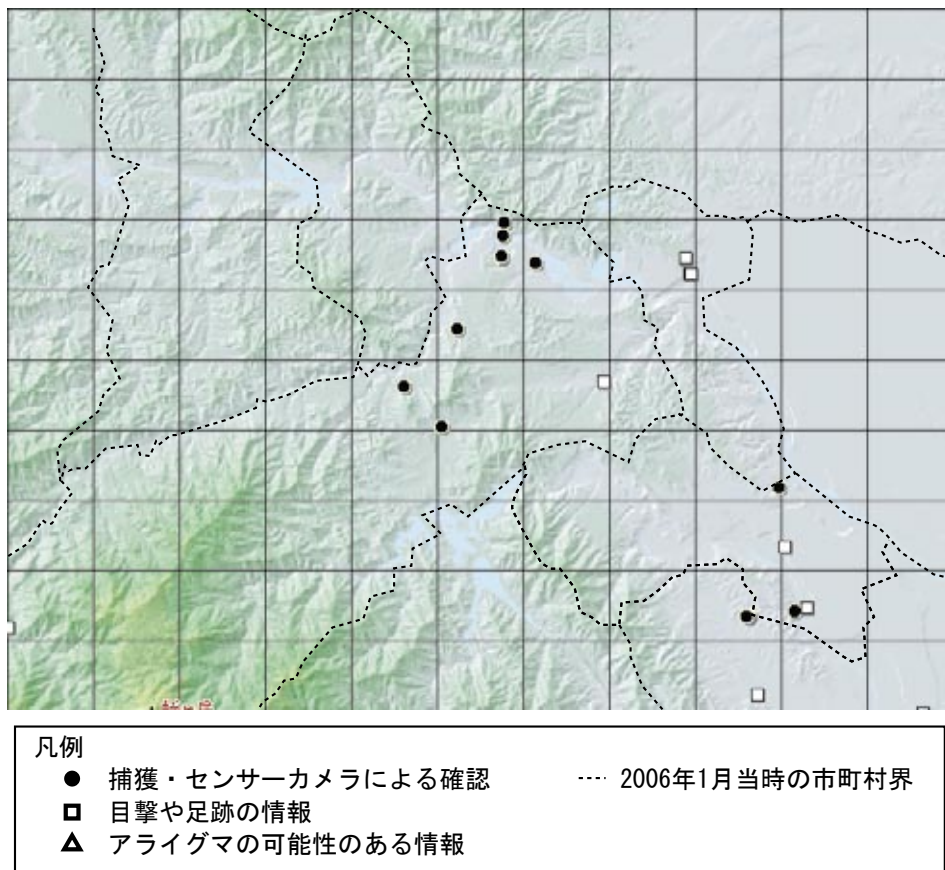


図 6. 野生動物調査により得られた情報 (2004 年～ 2006 年 8 月 まで)

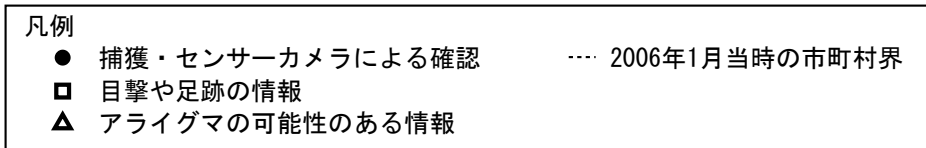
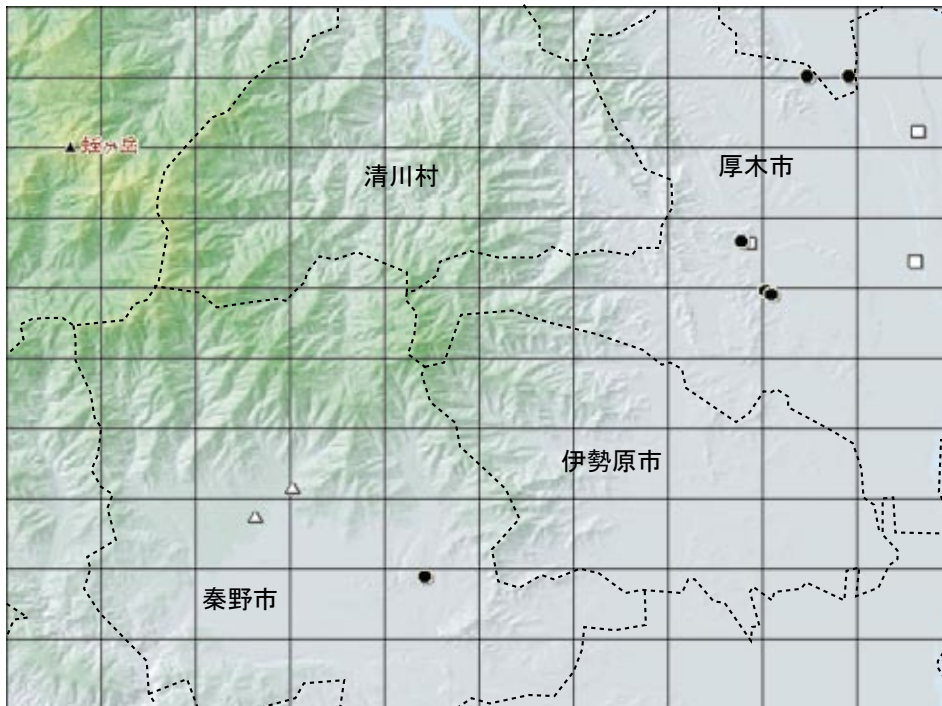


図 7. 厚木, 伊勢原, 秦野地域の市町村によせられた情報 (2004 年～ 2006 年 8 月まで)

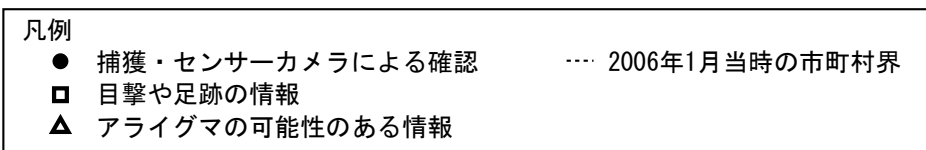
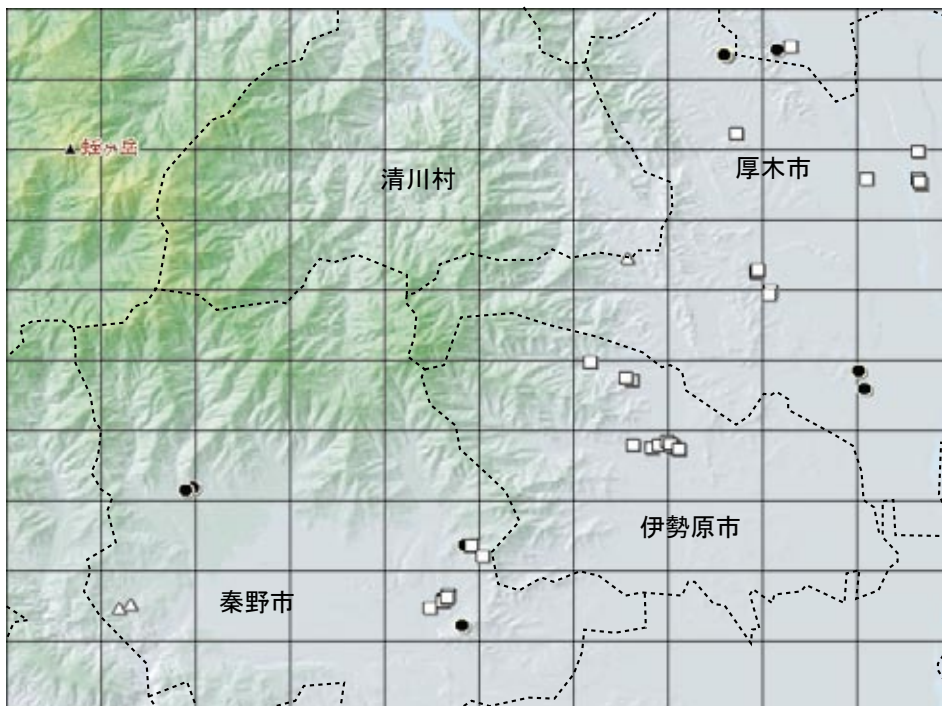


図 8. 厚木, 伊勢原, 秦野地域の野生動物調査により得られた情報 (2004 年～ 2006 年 8 月まで)



図 9. 落花生畑に残されたアライグマの足跡 (城山町)

和歌山県田辺市 (田辺鳥獣対策協議会, 2005), や北海道の事例 (小野, 2002) によると, 当初, アライグマの生息範囲は農耕地周辺と推測されていたが, 次第に山奥の森林でも生息が確認されるようになってきているという。また, 神奈川県でも, 横須賀市大楠山で 7, 8 月に発信器を装着して行動追跡調査をした結果, 農作物被害が多い時期にもかかわらず, 調査対象 2 個体の利用環境はほとんどが森林であり, 農地は含まれていなかったという結果が得られている (野生動物保護管理事務所, 2005)。こうしたことから, アライグマは, 森林環境に対する適応力が高いと思われる。今後, 地形の複雑な丹沢山地に分布が拡大した場合, 生息情報の収集手段として, センサーカメラなどの活用が有効であろう。

そして, 今回, 現地聞き取り調査でも市町村に報告されていなかった生息情報を収集することができた。農家や地域住民に広報誌などで生息情報を強く求めることで, 埋もれている情報を引き出すことができるかもしれない。また, 今後, 山地に分布拡大が予想されるため, 登山者や鳥獣保護員, 猟友会といった丹沢に携わる人々にも広くアライグマに関する情報提供を求める必要があるだろう。

そのためには, アライグマの生態や防除対策 (捕獲理由) について, 県民への普及が欠かせない。市町村や県の担当部署は, 農林業団体, 猟友会はもちろん, 各市町村の公民館, 博物館や県立ビジターセンター, 自然関連施設, 自然保護団体など, 地域で自然に関する普及に携わる施設, 団体へ積極的な情報提供を行う必要がある。それらの情報を元に一般市民へ普及を行うのが普及に携わる施設や団体の役割であろう。

そして, 目撃情報や被害情報が得られた場合は, すみやかに捕獲を行い, 野生下から排除すべきである。

(4) まとめ

今回, 丹沢山麓のアライグマの分布が東丹沢を中心に連続的になり, 定着地域が広がってきていることが明らかになった。

しかし, 現在, 丹沢山麓の市町村の多くが低密度の要注意地域に指定され, 重点対応地域とされる横須賀三浦地域と比較すると, 捕獲努力や捕獲に対する体制は十分とはいえない。丹沢山地には, 県内で丹沢山地のみに生息する生物種も多く存在する。横須賀市大楠山の有害駆除個

体の胃内容分析結果によると, 夏場, 農作物被害が多い時期にもかかわらず, 農作物よりも, セミ, クワガタ, カブトムシ, サワガニなど, 在来生物の捕食が多く確認されたという (野生動物保護管理事務所, 2005)。今後, 捕食される生物や, それらを食料とする在来中型哺乳類のタヌキ, キツネなどにとってアライグマの存在は大変な脅威となるであろう。

また, 三浦市では, 2001 年度にゼロであったアライグマによる農作物被害が, 2002 年度には 367,000 円, その後増え続け, 2004 年度には 14,888,000 円に達している。今後, 丹沢山麓の果樹や農作物など産業への被害が懸念される。

生物は密度の低い地域では増え方が早くなるため, 低密度地域こそ大きな捕獲努力が必要といわれる (小池, 2006)。神奈川県から分布拡大したと想定する 13 年後の分布予測シミュレーションでは, その外縁が, 沼津-河口湖-大月-奥多摩町にまで達するとされ (小池, 2006), 広範囲の根絶は大変困難を極めることが予想される。効率的な捕獲, 被害防除を行うために, アライグマの生態, 生態系への影響の解明など, 大学など専門機関によるさらなる研究の充実, そして, 市民は積極的に情報提供に努めること, 県, 市町村, 専門業者は, アライグマの可能性がある目撃, 被害情報を入手した場合, 迅速な捕獲を実施すること。神奈川県アライグマ防除実施計画を補完する形で, 分布最前線における情報収集と捕獲体制の整備, 地域間の情報ネットワークの確立を急がねばならないであろう。

今まさに分布拡大最前線である丹沢山麓において, 防除体制を整えることは, さらなる周辺地域への分布拡大を防ぐ意味でも大変重要である。

文 献

- 池田 透, 2002. アライグマ〜ペットが引き起こした惨状. 日本生態学会編, 外来種ハンドブック, pp.70. 地人書館, 東京.
- 株式会社野生動物保護管理事務所, 2005. 平成 17 年度アライグマ生息状況調査委託調査報告書. 46pp.
- 神奈川県, 2006. 神奈川県アライグマ防除実施計画. 18pp.
- 金田正人, 1999. アライグマの分布について・その 2. 三浦半島自然誌研究会通信, (15): 1.
- 小池文人, 2006. 神奈川県のアライグマ対応戦略. 自然保護, (493): 12-14.
- 牧野 敬, 2002. 神奈川県自然環境保全センターに搬送されたアライグマの記録. 神奈川県自然環境保全センター自然情報, (1): 1-6.
- 小野 理, 2002. 北海道のアライグマ対策の経緯と課題. 日本生態学会編, 外来種ハンドブック, pp.26-27. 地人書館, 東京.
- 田畑真悠, 2006. 神奈川県西部域における外来種アライグマの分布 -2004. 神奈川自然誌資料, (27): 21-26.
- 田辺鳥獣対策協議会, 2004. 田辺市におけるアライグマ調査報告書. 66pp.
- 常田邦彦, 2001. ノヤギ, マングース, アライグマ, タイワンザルの現状. 川道美枝子編, 移入・外来・侵入種, pp.212-213. 築地書館, 東京.